

ことばに表われた家族と家——その2「壁」

西 川 祐 子

佐 藤 方 代

吉 川 寛

山 田 伸 明

水 野 豊

はじめに

われわれの共同研究（国際地域研究所，文化プロジェクト）は第2回テーマに「壁」を選び，初年度と同じく毎週1回の定期研究会をひらいた（第1回テーマ「窓」については『国際研究』第3号参照）。のちに参考文献として挙げる資料の輪読を行ったほかに，各自の研究分担をきめ，それぞれの中間報告をおこなった。イギリス留学から帰国した山田伸明は，日本建築の壁と建具がつくりだす空間である「間」についてサセックス大学で研究発表をしたときの聴衆の反応に関する興味深い報告をしている。西欧建築の壁と日本建築の壁とは，そもそも，構造的に異なるため，壁によって分節される空間の意味も異なるのである。

だが，その一方でわれわれは，われわれが現在，西欧建築の石の壁の家にも，日本建築の竹を編み土を塗った壁の家にも，ほとんど住むことがないということを忘れてはならないであろう。すでに住宅建築の主流は鉄筋コンクリートやパネル組み立てに移っている。現代建築の発想が伝統から切れるとき，言葉の問題には彼我の違いだけではなく，共通の変化がどのような表われ方をするだろうか。

この問題に入る前に，本学の工学部建築学科の豊田洋一氏を研究会にま

ねき、建築家の立場から、西欧建築の壁と、日本建築の壁の違い、現代建築の壁のかかえる問題について話していただいた。同氏の解説は、われわれに物としての壁についての基礎知識を与えるものであった。お許しを得て、ここにその要約を記する。

建築学上、壁は空間を仕切る物と定義されるが、何と何を仕切るかによって三つに分類される。すなわち二つの外部空間を仕切る外部壁（いわゆる塀）、外部空間と内部空間を仕切る外周壁、二つの内部空間を仕切る内部壁（間仕切り壁）である。

壁の機能は、その中にある開口部と一体になって、熱、光、音、空気、人、視線といったエネルギー・物質・情報を遮断したり交換したりする調節機能である。日本建築の壁の扱いは、西欧建築の石の壁と比較するとき、交換する機能において優れていると言える。

また、石やレンガを積む組積式の西欧建築の壁は、構造体の一部をなしており、壁を外せば、建築全体の崩壊が起こる、耐力壁である。日本建築の木組み架構式構造の壁は、荷重を負うことのない非耐力壁である。西欧建築の歴史は壁の強度をおとさずに窓を大きくする努力の歴史であり、日本壁の歴史はむしろ穴を塞ぐための努力の歴史であったという指摘は興味深かった。

日本建築の古代の竪穴式住居では、屋根が地に根をおろしており、壁は無かったと考えられる。ついで草を編んだ壁、その上に泥を叩きつけた壁が現れた。上塗りを施す左官工事を伴う壁は、奈良時代に仏教伝来とともに寺院の白亜上塗りの技術として大陸から輸入された。戦国時代には、城の建築の増加に伴って左官工事が発達した。この白壁造りの技術が、江戸時代には、土蔵の壁や、民家の土塀に應用されて広く普及するにいった。

だが、壁造りの技術が発達した後も、日本の住宅建築には間仕切り壁はほとんど無く外周壁も原則として建物の妻側にかざられる。家の内部は動

く建具によって「間」に仕切られるが、建具をとりはらうと内部は一体空間となる。したがって壁にかこまれた「室」は元来、ムロを指すものであって、茶室のほかには用いられない。「部屋」も、小屋が屋内に入ったものであって、「間」とは性格を異にするという柳田国男（『明治大正史世相編』193頁）の指摘がある。

以上のような西欧建築の壁と日本建築の壁の根本的な相違は、結局のところ組積式建築と架構式建築の違いに由来するものであった。しかし近代工業による新しい建築材料の出現と建物の内容である現代人の私生活の変化にもとずく要求によって、西欧建築と日本建築は共に激しく変わりつつある。

特に日本人の生活には、明治以来の西洋化の流れの中で、プライバシー尊重の傾向が生じ、柱と壁や建具によってつくられる「間」が、壁によって囲まれた「室」へと変化しつつある。壁や建具の材料も、木、土、紙、といった自然材料よりもコンクリート、ボード、クロスといった人工材料あるいは化学材料が増えている。柱の見えない大壁造りの壁が多くなり、壁や柱の精神的意味が変りつつあるのではないかという感想が豊田氏から出された。われわれは、この問題を言葉の問題としてうけとめ、以下の共同研究において考えたい。

共同研究は今回も前回と同じく対照言語学 (Contrastive Linguistics) の方法を用いる。媒介言語は日本語とする。〈壁〉(日本語)、〈wall〉(英語)、〈Wand〉と〈Mauer〉(ドイツ語)、〈mur〉(フランス語)のあいだの重りとずれを明らかにすることを目的としたアンケート調査と文献資料の分析を行い、その結果を以下のようにまとめた。基本語〈壁〉についての分析項目、アンケート質問表は共同討議を重ねながら作製した。

以下、論文「〈壁〉とは」は、共同研究者全員による共同執筆である。他はそれぞれ個別論文であって吉川論文は「〈壁〉と〈Wall〉」、佐藤論文は「〈壁〉と〈Wand〉および〈Mauer〉」、水野論文は「〈壁〉と〈Mur〉」

の対照研究を行う。山田論文「間仕切りと居住空間」は、英語圏における壁などにより仕切られた現代の居住空間の問題を扱う。西川論文「安部公房の〈壁〉」は、小説「S. カルマ氏の犯罪」とそのフランス語訳を分析する。

前記のように、建築学用語では住空間を仕切る三種の壁を外部壁、外周壁、内部壁と呼ぶ。日本語の〈壁〉はこの三種の壁のすべてを指すことができない。そこで、とくに外部壁を指すとおもわれる〈塀〉を加えて考えることにした。他の言語においては建築学上の三種の壁の違いはどのように意識されているのだろうか。

現代人は壁の中で誰が、また誰が誰と、どんな暮らしをするのかを絶えず問うている。われわれも言語意識をできるかぎり明確にすることにより、生活や文化の問題を考える手掛りを得たい。

〈壁〉とは

1. 定義と語源

『日本国語大辞典』（小学館）によれば、〈カベ〉は「建物の周囲、または内部を区切る仕切り」であり、〈ヘイ〉は「家屋や敷地などの境界とする、かこい」と定義されている。

〈カベ〉の語源説は、カヘ（垣隔）、カキヘ（垣方、構隔）、カギリベ（限方）などで、囲いや仕切りを表わすものと思われる。〈ヘイ〉の語源説は見当たらない。

〈カベ〉に当てられる漢字の〈壁〉は、「さける、よける」を意味する〈辟〉に〈土〉をそえたもので、「風雨を防ぐための土のカベ」を表わす。また、〈ヘイ〉は〈屏、塀〉で表わし、このうち〈屏〉は「㊦へい、かき、ついじ、まがき。㊧びょうぶ、ついたて。㊨おおう、かこう。㊩おそれる、しりぞく。㊪しりぞける、のぞ(除)く。」の意義があり、〈塀〉はこれの俗字〈屏〉に〈土〉をそえた国字である。以下、本論では〈屏〉を使う。

2. 関連語彙

2.1 類語と種類

当然のことであるが、壁は空間を仕切ることが主たる機能である。この観点から、〈壁〉の類語を拾い出してみると次の様な語が挙げられる。

〈断蔽物〉、〈障害物〉、〈仕切り〉、〈間仕切り〉、〈囲い〉

以上の語は〈壁〉の上位語とも考えられうる。

次に、居住空間を仕切るものに限定して〈壁〉の関連語彙を挙げてみよう。

a. 屋内に関するもの：〈襖〉、〈唐紙〉、〈障子〉、〈衝立〉、〈敷居〉、〈スクリーン〉、〈カーテン〉、〈壁代〉⁽¹⁾

b. 屋外に関するもの：〈塀〉、〈垣根〉、〈生垣〉、〈柵〉、〈フェンス〉、〈土居〉⁽²⁾、〈壁垣〉⁽³⁾、〈牆壁〉⁽⁴⁾

aの語群と〈壁〉との相違は、直感的に言って、壁は多くの場合、その建造物の構造と関っていて、その建造物の基本的な要素の一つであるので簡単には取りはずすことはできないが、aの語群は、いわゆる内装品であって、ほとんど全て移動することが容易である。この様に、〈壁〉とaの語群では可動性ということで大きな相違が見られる。

bの語群に関しては、特に注目すべきは〈塀〉であろう。前述した様に、〈塀〉は建築学でいう外部壁にあたるが、一般の人々の言語認識では〈壁〉と〈塀〉とは確かに各々の意味範囲で重複する所が多いと想像されうるが、何か違うという意識は否めないだろう。このことに関しては次の章で詳しく検討を行うが、この章では〈塀〉または〈屏〉の関連語彙を〈壁〉と併せて挙げるにとどめる。

壁と塀の種類を表わす語は数多く見うけられるが、まず、壁を材料と機能の観点から分類列举してみよう。

。材料：〈土壁〉、〈コンクリート壁〉、〈れんが壁〉、〈ブロック壁〉、〈鉄骨被覆壁〉、〈板壁〉、〈木造壁〉、〈日本壁〉、〈和風壁〉、〈砂壁〉、〈繊維壁〉、

〈京壁〉, 〈大津壁〉, 〈くず糸壁〉, 〈真綿壁〉, 〈木はだ壁〉, 〈こまい壁〉⁽⁵⁾, 〈白壁〉, 〈白亜〉, 〈荒壁〉

◦機能: 〈隔壁〉, 〈側壁〉, 〈城壁〉, 〈胸壁〉⁽⁶⁾, 〈小壁〉⁽⁷⁾, 〈大壁〉⁽⁸⁾, 〈腰壁〉, 〈垂壁〉, 〈袖壁〉, 〈単壁〉⁽⁹⁾, 〈盲壁〉, 〈真壁〉, 〈外壁〉, 〈内壁〉, 〈間仕切り壁〉, 〈防火壁〉, 〈耐震壁〉, 〈カーテンウォール〉, 〈戸境壁〉⁽¹⁰⁾

次に〈塀〉についても分類列举してみよう。

◦材料: 〈板塀〉, 〈縦(堅)板塀〉, 〈下見板張り塀〉, 〈羽目板塀〉, 〈大和打板塀〉, 〈柵板塀〉, 〈籠子塀〉⁽¹¹⁾, 〈生子板塀〉, 〈掘立塀〉⁽¹²⁾, 〈竹とくさ塀〉, 〈ひしぎ竹塀〉, 〈よしず塀〉, 〈土塀〉, 〈壁塀〉, 〈築地塀〉⁽¹³⁾, 〈くれんが塀〉, 〈練り塀〉⁽¹⁴⁾, 〈瓦塀〉, 〈組積塀〉, 〈ブロック塀〉, 〈(鉄筋)コンクリート塀〉, 〈コンクリート組立塀〉, 〈クリンプ網塀〉

◦機能: 〈仕切り塀〉, 〈高塀〉, 〈目かくし塀〉, 〈防火塀〉

◦形状, 外観: 〈透塀〉⁽¹⁵⁾, 〈太鼓塀〉⁽¹⁶⁾, 〈櫛形塀〉⁽¹⁷⁾, 〈連子塀〉, 〈ルーバー塀〉, 〈唐塀〉

◦その他: 〈源子塀〉⁽¹⁸⁾, 〈万年塀〉⁽¹⁹⁾, 〈蕃塀〉⁽²⁰⁾

以上〈壁〉, 〈塀〉とも, その語彙の大半はどちらかと言えば専門用語であり余り一般になじみのないものである。

2.2 関連語句

ここでは〈壁〉, 〈塀〉, 〈屏〉という語を含む, 成句以外の合成語を扱うことにする。まず〈壁〉について見てみよう。

◦建築関係にこの様な合成語が多いのは当然である。例として次の様なものが挙げられる。

〈壁板〉, 〈壁構造〉, 〈壁仕上げ〉, 〈壁下地〉, 〈壁砂〉, 〈壁大工〉, 〈壁塗大工〉, 〈壁叩大工〉⁽²¹⁾, 〈壁土〉, 〈壁床〉, 〈壁直〉, 〈壁塗〉, 〈壁貫〉⁽²²⁾, 〈壁張〉, 〈壁梁〉, 〈壁屋〉, 〈壁渡殿〉⁽²³⁾, 〈壁紙〉, 〈壁紙模様〉, 〈壁形ケーソン〉, 〈壁コンセント〉, 〈壁下布〉⁽²⁴⁾, 〈壁草〉⁽²⁵⁾, 〈壁木舞〉⁽²⁶⁾, 〈壁中

門⁽²⁷⁾，〈壁クレーン⁽²⁸⁾〉，〈荒壁土〉，〈壁心（真）⁽²⁵⁾〉，〈壁体⁽²⁶⁾〉，〈壁付アーチ〉，〈壁着瓦〉，〈壁寸莎⁽²⁷⁾〉

。形，外観から壁様のものを表すのに〈壁〉を使用する語が若干ある。

〈岩壁〉，〈氷壁〉，〈絶壁〉，〈壁白物⁽²⁸⁾〉，〈壁睨⁽²⁹⁾〉，〈壁竈⁽³⁰⁾〉

。上と同じ分類としてもよいかも知れないが，壁の持つ地肌の感じを織物に結び付けた一連の関連語彙があるが，総じて特殊な用語であり，一般的ではない。

〈壁織〉，〈壁糸〉，〈壁布楽〉，〈壁糸織〉，〈壁御召〉，〈壁紙布〉，〈壁透綾〉，〈壁著羅〉，〈壁羽二重〉，〈壁風通〉，〈壁銘仙〉，〈壁紹〉

。壁に掛けたり付けたりするものとしては次の例である。

〈壁掛〉，〈壁掛電話機〉，〈壁掛小便器〉，〈壁付暖炉〉，〈壁絵〉，〈壁画〉，〈壁飾〉，〈壁新聞〉，〈壁書⁽³¹⁾〉

。壁との位置関係に関する語句が若干ある。

〈壁側〉，〈壁際〉，〈壁越〉，〈壁越推量〉，〈壁隣〉，〈合壁⁽³²⁾〉，〈壁一重〉

。壁を不動の対象物とみなし，それに対して実りのない抵抗をすると言う意味での合成語があるが，総じて古い表現である。

〈壁見参⁽³³⁾〉，〈壁言⁽³⁴⁾〉，〈壁訴訟⁽³⁵⁾〉

。防御，保護に関するものは意外に少なく次の様なもの位である。

〈鉄壁〉，〈防壁〉，〈壁銀⁽³⁶⁾〉

。その他としては次の様なものがある。

〈壁鉤⁽³⁷⁾〉，〈岩壁鹿⁽³⁸⁾〉，〈壁湿⁽³⁹⁾〉，〈壁伝〉，〈壁登⁽⁴⁰⁾〉，〈壁離⁽⁴¹⁾〉，〈壁笔⁽⁴²⁾〉

次に〈塀〉および〈屏〉については以下の通りである。

。塀そのもの，または，塀様のものを表わす語彙としては次のものが挙げられる。

〈塀垣⁽⁴³⁾〉，〈塀切⁽⁴⁴⁾〉，〈屏障⁽⁴⁵⁾〉，〈屏牆〉，〈塀礎⁽⁴⁶⁾〉，〈屏代⁽⁴⁷⁾〉，〈屏風⁽⁴⁸⁾〉，〈屏慢⁽⁴⁹⁾〉

。分け隔てたりすることを比喩として含む語がある。これは〈屏〉の字の語義から言っても当然であろう。

〈屏去〉⁽⁵⁰⁾，〈屏居〉⁽⁵¹⁾，〈屏語〉⁽⁵²⁾，〈屏絶〉⁽⁵³⁾，〈屏息〉⁽⁵⁴⁾，〈屏面〉⁽⁵⁵⁾，〈屏禁〉⁽⁵⁶⁾

。その他として次の様なものがある。

〈屏宮〉⁽⁵⁷⁾，〈塀際〉，〈屏中(門)〉⁽⁵⁸⁾，〈屏地〉⁽⁵⁹⁾，〈屏十郎〉⁽⁶⁰⁾，〈塀隣〉，〈塀ばしら〉

以上の関連語句を全体的にながめて言えることは、壁や塀は、どちらかと言うと、機能的なものである所以目立った存在ではない。それ故、その連想からくる関連語彙は予想より少ない。特に、〈壁〉に関して言えば、防御、保護と言う肯定的な意味を有する関連語彙は数多くあるものと予想していたが、実際はそれに反して数える程しかない。このようなことは、高温多湿の日本の気候風土からみて、遮蔽するものがあるべく少なく、通風の良い家屋がよしとされてきた今までの家屋の認識と無縁ではないだろう。

3. 他の語との共起関係

〈壁〉のもつ意味内容を具体的に捉える手がかりとして、連体修飾語句および動詞との共起関係を検討してみる。その際、外部壁を表わす〈塀〉についても、同じ語句との共起関係を調べ、その結果との対照比較を行った。そこには、〈壁〉の意味をより明確にする、共起関係の重なりとずれが予想されるからである。

現実の共起関係の可否についての判断は、具体的な使用例に関するアンケート調査を行い、その結果を参考にした。

3.1 連体修飾語句との共起関係

〈壁〉にかかる連体修飾語句のうち、次の8項目をここで取り上げる。

1) 位置に関する修飾語句

- 2) 形状に関する修飾語句
- 3) 実質に関する修飾語句
- 4) 感覚に関する修飾語句
- 5) 状態に関する修飾語句
- 6) 機能に関する修飾語句
- 7) 素材に関する修飾語句
- 8) 情感に関する修飾語句

これらの項目は、〈壁〉を分析するために必要と思われる語彙を集め、『角川類語新辞典』を参考にして分類したものである。

以下にそれぞれの項目ごとに、アンケートの結果をふまえて、共起関係のあり方を検討する。

アンケートは、当初 25 人に対して、共起を可とするもの (○)、不可とするもの (×)、条件付可ないしは不明 (?) のいずれかを直感的に記してもらう方法をとった。ところが、一部にアンケートの主旨を誤解して答えたものがあつたため、参照できる解答の実数が、連体修飾語句と動詞との間で不揃いになった。そこで、可とする答えの多少をみるときに実数をそのまま比較することは不可能であるから、有効な解答総数に対する百分率の数字を比べる方法をとらざるを得なかった。従って、項目別にあげた () 内の数字は、当の表現を可とする解答のパーセンテージである。しかし、基本となるインフォーマントの総数からみて、1 の位の差は大きな意味をもたないものと考えられる。

3.1.1 位置に関する修飾語句

南の壁 (84)	南の塀 (92)
南に面した壁 (96)	南に面した塀 (100)
前／うしろの壁 (84)	前／うしろの塀 (92)
外／外側の壁 (84)	外／外側の塀 (84)
内の壁 (76)	内の塀 (60)

内側の壁 (92) 内側の塀 (84)

これら位置に関する修飾語は、〈壁〉についても〈塀〉についても、ほとんどの場合に共起可能である。ただ、アンケートの結果では〈内の〉〈内側の〉以外はすべて、〈塀〉について可とする答えが、僅かながら〈壁〉よりも多い。それ自体を独立した建造物とみなすことのできる〈塀〉に比較すると、〈壁〉は建物の部分を形成するものとして、独自に位置を示す修飾語との共起に異和感をもたれる場合があるものと思われる。

〈内の〉、〈内側の〉のみは〈壁〉との共起関係が〈塀〉の場合より許容度が高い。〈壁〉が建物内部の仕切りをも意味することによる当然の結果といえよう。

3.1.2 形状に関する修飾語句

形状に関する修飾語は、形を表わすものと大きさを表わすものに分けられる。

3.1.2.1 形を表わす場合

四角い壁 (88)	四角い塀 (80)
長方形の壁 (80)	長方形の塀 (76)
平らな壁 (76)	平らな塀 (52)
卵形の壁 (36)	卵形の塀 (20)
楕円の壁 (48)	楕円の塀 (12)

日常生活の中で見られる〈壁〉〈塀〉の形から当然予想できるように、〈卵形の〉以下は許容度が低い。とはいえ、〈壁〉については、〈塀〉に比べればいずれも可とする答えが多かった。建築物の壁の形はさまざまなものがありうるという事実が、言葉の上に表われているものと考えられる。その場合の〈壁〉とは壁面を意味している。〈塀〉にはそうした「面」の意味は含まれていないことが数字に反映していると思われる。

3.1.2.2 大きさを表わす場合

大きい壁 (100)	大きい塀 (96)
巨大な壁 (100)	巨大な塀 (76)
小さい壁 (96)	小さい塀 (84)
広い壁 (96)	広い塀 (72)
厚い／薄い壁 (96)	厚い／薄い塀 (64)
長い壁 (76)	長い塀 (100)
短い壁 (60)	短い塀 (92)
背の高い／低い壁 (64)	背の高い／低い塀 (92)
高い／低い壁 (84)	高い／低い塀 (100)

〈厚い〉までは〈壁〉と結びつき易いが〈長い〉以下は許容度が下がる。逆に〈塀〉は〈長い〉以下との結びつきが安定している。〈塀〉が基本的に長さ高さによって測られる単純な建造物であるのに対し、〈壁〉は厚さと広がりを含む、より多様な尺度によって捉えるべきものであることを示している。また、〈高い／低い塀〉の許容度が100%であるのに対し〈高い／低い壁〉は84%なのは、〈塀〉の高さはそれ自体で独立して定められるけれども、〈壁〉は必ずしも自立して独自に高さをもたないことによるのであろう。

3.1.3 実質に関する修飾語

実質とは、そのもの自身の質的な内容を意味する語を指す。

強い／弱い壁 (88)	強い／弱い塀 (76)
かたい壁 (88)	かたい塀 (64)
柔らかい壁 (68)	柔らかい塀 (24)
緻密な壁 (28)	緻密な塀 (12)
まばらな壁 (8)	まばらな塀 (24)
中空の壁 (52)	中空の塀 (0)
しなやかな壁 (16)	しなやかな塀 (20)

この項目では (?) とする答の多いものが目立った。具体的にそれらのパーセンテージを記すと、〈まばらな壁〉(92)、〈まばらな塀〉(68)、〈中空の塀〉(80)、〈しなやかな壁〉(84)、〈しなやかな塀〉(64) などとなっている。これは、何らかの前提があれば可とされうることであり、詳しく検討しなおす必要がある。その中で〈かたい〉、〈柔らかい〉、〈中空の〉などが〈壁〉と結びつき易いのは、3.1.1.2 大きさの項でも述べたように〈壁〉には厚みが想定されていること、さらには弾力性さえ感じうることを示している。

3.1.4 感覚に関する修飾語句

感覚に関する修飾語句のうち、〈壁〉と結びつきうるものとして、触覚に関するものと視覚に関するものを取り上げた。

3.1.4.1 触覚を表わす場合

滑らかな壁 (88) 滑らかな塀 (48)

粗い壁 (76) 粗い塀 (40)

冷たい壁 (80) 冷たい塀 (40)

温かい壁 (72) 温かい塀 (36)

これらの修飾語はいずれも〈壁〉と共起し易い。一方、〈塀〉との共起を可とした答えはすべて 50% 未満であった。〈壁〉は生活の場で常に身近かな存在であり、実際に触れてみる機会も少なくない。そうしたことが言葉の上に表われた結果と考えられる。

3.1.4.2 視覚を表わす場合

赤い壁 (88) 赤い塀 (76)

白い壁 (100) 白い塀 (96)

青い壁 (96) 青い塀 (80)

黒い壁 (88) 黒い塀 (100)

彩色した壁 (88) 彩色した塀 (76)

絵を画いた壁 (96) 絵を画いた塀 (76)

無色の壁 (60) 無色の塀 (40)

透明な壁 (52) 透明な塀 (24)

〈絵を画いた〉までは、いずれも共起の可能性が強いが、〈黒い〉以外
は〈壁〉に対する許容度がやや高く、〈無色の〉〈透明な〉についてはかな
り大きな差が見られる。〈壁〉には、外見上も多様なあり方が認められる
と考えてよいであろう。

3.1.5 状態に関する修飾語句

まっすぐな壁 (84) まっすぐな塀 (100)

崩れた壁 (100) 崩れた塀 (84)

壊れた壁 (92) 壊れた塀 (100)

開いた壁 (24) 開いた塀 (48)

閉じた壁 (24) 閉じた塀 (40)

荒れ果てた壁 (84) 荒れ果てた塀 (56)

乾いた壁 (100) 乾いた塀 (56)

湿った壁 (96) 湿った塀 (56)

既にいくつかの項目で述べたように、〈壁〉には厚みがあり、形や性質
が多様で、身近かに触れる機会が多いことからみて、〈まっすぐな〉、〈崩
れた〉、〈壊れた〉、〈乾いた〉、〈湿った〉などについての数字は予想通りの
結果である。〈開いた〉、〈閉じた〉が、低い可能性ながら〈壁〉よりも
〈塀〉と結びつき易いのは、〈塀〉の方に可動性が感じられるのであろう
か。

3.1.6 機能に関する連体修飾語句

〈壁〉の機能として、内部を保護することと、何かを閉じこめることが
考えられる。

守る壁 (60) 守る塀 (52)

息苦しい壁 (72) 息苦しい塀 (64)

重苦しい壁 (76) 重苦しい塀 (52)

保護を意味する例は〈守る〉以外、違った意味での解答が多くここで取り上げるには不十分であり再検討すべきものの一つである。

3.1.7 素材に関する修飾語句

石の壁 (80)	石の塀 (84)
木の壁 (84)	木の塀 (100)
レンガの壁 (92)	レンガの塀 (92)
土の壁 (96)	土の塀 (92)
金属の壁 (68)	金属の塀 (60)
ガラスの壁 (76)	ガラスの塀 (28)
陶器の壁 (60)	陶器の塀 (40)
紙の壁 (32)	紙の塀 (24)
トタンの壁 (64)	トタンの塀 (84)

インフォーマントがモノの存在を考えるかどうか、そのまま言葉の可否へつながらる答えとなり、このような数字に表われたものと思われる。

3.1.8 情感に関する修飾語句

楽しい壁 (52)	楽しい塀 (40)
悲しい壁 (28)	悲しい塀 (12)
孤独な壁 (48)	孤独な塀 (20)
恐ろしい壁 (52)	恐ろしい塀 (24)

情感に関する修飾語句は、〈悲しい〉を除き〈壁〉に対して50%前後が可として居り、かなりの差をもって、〈塀〉よりも許容度が高い。3.1.4.1 触覚の項でも述べたように、〈壁〉は日常生活と深く関わり接触も緊密なので、〈塀〉よりも、擬人化や感情移入が容易に起こりうるのであろう。情感に関する修飾語句との結びつきは、そうしたことが背景になっていると考えられる。

以上のように、連体修飾語と〈壁〉および〈塀〉との共起関係を検討してきた。〈塀〉が比較的単純な形と機能をもつ独立した建造物であるのに

対して、〈壁〉は家の外と内を仕切ると同時に内部をも仕切るなど、より複雑な構造と役割をもち、人の住まいと生活に密着していることが、連体修飾語との共起関係にも表われている。その表われの一つは多様な形状、色彩、素材を意味する修飾語句と結びつくことである。次いで、身近かな存在であることを示すものとして、触覚に関する語との共起関係、擬人化や感情移入につながる、情感を表現する語との結びつきを指摘することができる。

3.2 動詞との共起関係

文献調査では、〈壁〉と共起する動詞は、建設、建設後の状態、あるいは状態変化に関係したものが多かった。さらに、間仕切りなどの仕切り、防御、収納性という様な機能に関係した動詞との共起も多々見られた。

その様な理由で、アンケート調査では、上記の部類に属する動詞を中心に〈壁〉との共起関係を調べた。さらに、どの程度、壁を擬人化したり、壁に対して感情移入をすることが可能かということを知る為に、知覚動詞、往来発着、あるいは移動を表わす動詞との共起関係も調べてみた。

3.2.1 以下は、そのアンケート結果のうち、重要と思われるものを簡単にまとめたものである。なお、ここでは、〈扉〉と動詞との共起関係は、〈壁〉と動詞との共起関係と対照する必要がある場合のみ述べることにする。

ところで、動詞との共起関係を調べるアンケート作成、あるいはその結果の分析に当っては以下の三点に特に注意した。

第一点は、〈壁〉が面的すなわち壁面として捉えられるか、あるいは立体的すなわち壁体として捉えられるかという点である。国広（1970：135）で述べられているように、〈破る〉の様に壁を面的な視点で捉える動詞と〈こわす〉の様に立体的な視点で捉える動詞がある。従って、どの様な動詞が壁を面的、あるいは、立体的に捉えるかを調べ、さらに、一般に人は壁面に主に注目するか、壁体に注目するかということを探る必要がある。

第二点は、壁が存在する場所である。東（1981：144）に依れば「…、部屋などの仕切り面を考えるか、庭などに囲いとして設けられたものかで「壁」と「塀」が区別される」ということである。この点是我々が一般的に理解していることであるが、さらに国境、町、刑務所などに設置されているものが、はたして〈壁〉あるいは〈塀〉という語のうちいずれで呼ばれるかということを調べることも意義があると思う。例えば、中日新聞（昭和62年2月23日朝刊）には、ベルリンの壁の上を歩いて東側に落ちて捕えられた米国人に関しての記事の中で「…、世界の人々が見ている前で壁をぶち破ってみせる、と意気盛んだ」という文章が見られる様に、上記の東氏の説明ではカバーしきれない〈壁〉の用例がある。さらに、設置場所を明らかにしない場合、インフォーマントがいずれの設置場所を想定して、〈壁〉と動詞との共起関係の可否を決めたか明らかでない場合がある。その様な理由で、アンケートの中にも設置場所が明らかな文章も一部含めておいた。

第三点は、壁と塀のうちいずれが乗り越えるのが難かしいと感じられているかという点である。〈その捜査は完全に壁に突き当たった〉という様な表現をよく耳にする。この様に、〈壁〉には、いわゆる主観的に障害となるもの、と解釈できる表現があるから、当然、塀に較べ、壁の方が乗り越えられる可能性（克服可能性）が少ないと考え得るが、はたして実際にそうかという点を調べてみる必要がある。

さて、以下、〈壁〉が主語の位置にくる場合、目的語の場合、主に場所を表す格助詞〈に〉と文節を形成する場合、手段を表す格助詞〈で〉と文節を形成する場合に分けて検討する。なお、動詞の分類に関しては、金田一（1950）の分類を一部参考にした。

3.2.1 〈壁〉が主語となる場合

ここでは、主に、壁の設置から設置後の変化、最終的な破壊を表す動詞、並びに、機能を表す動詞に分けて検討したい。しかし、その前に知覚

動詞との共起関係を見てみよう。

3.2.1.1 知覚動詞

壁が見る (33), 壁が聞く (38)

上記の文が容認不可能となるのは、壁は生物ではないから当然のことといえよう。しかし、〈塀が見る〉、〈塀が聞く〉よりは、はるかに容認可能性が高い。〈塀〉が主語となっている後者の二文は双方とも許容度が10%にすぎなかった。これは、壁は塀より、普通、我々の身近にあり擬人化、あるいは、感情移入しやすい対象であるということを示しているといえよう。さらに、〈壁があんたの言っていることを聞いているよ〉という様に、明らかに〈壁〉が擬人化されていると取れる文脈では許容度が大きくなり62%の人が可とした。また少しおかしいとした人も比喩的に使うなら良いという但し書きを付けた。ちなみに、主語を上記の文に於いて〈塀〉に換えた場合は、ほぼ20%の人しか可としなかった。

3.2.1.2 設置が関係してくるもの

壁が建つ (62)

上記の文を容認不可能であるとした人が、かなり多いのは、〈家が建つ〉なら良いであろうが、家の一部を構成する壁だけを捉えて〈建つ〉を使うのはおかしいと判断した人が多い為であろう。一方〈塀が建つ〉に関しては86%の人が完全に可としている。また、不可とした人のうち2/3がややおかしいとした人である。これは塀の方が他と独立して存在し得る可能性が強い為であろう。

3.2.1.3 変化が関係してくるもの

3.2 で述べた様に、壁面の変化が主に関係する動詞と壁体変化が主に関係してくる動詞とに分けて検討したい。但し、壁面壁体双方が関係してくる場合もあり、両者をはっきり二分するのが困難な場合もある。なお、時には壁の部分的変化や全体的な変化も関係してくる動詞もある。さらに、変化にも、良い方へ向かう変化と、悪い方へ向かう変化がある。その点を

はっきり示す為に良い方へ向かう変化には (+), 悪い方へ向かう変化には (-) を付けて分類したが、いずれとも考え得ない場合は中立的な変化とした。

a. 一般的な変化

壁が変わる (81), 壁が変える (19)

〈壁が変わる〉は自動詞文であるので、文脈をはっきりさせなくてもかなり容認可能性が高いが、〈壁が変える〉は〈変える〉が他動詞であるので、目的語句を省略した場合は上記の様な容認可能性しかなかった。しかし、〈壁が部屋の雰囲気を変える〉という様に目的語句を明示するとほぼ 100% 可とされた。ところが〈壁が町／庭の雰囲気を変える〉はかなり容認可能性が下った。それとは対照的に〈塀が部屋の雰囲気を変える〉は 24%, 一方〈塀が町／庭の雰囲気を変える〉はほぼ 100% であった。これは壁と部屋とのかかわりは大きいが、町、庭とは関係が少ないということを示している。なお、〈塀〉の場合はその逆のことが言える。

b. 壁面 (-) 変化

壁が汚れる, 壁がきたなくなる, 壁が黒ずむ, 壁がぬれる, 壁がしめ
る, 壁がひびわれする (以上ほぼ 100), 壁がはげる (91), 壁が破れ
る (38)

〈破れる〉は森田 (1981) によると、「平面状で厚みのあまりないものに用いられる」ということであるのでこの部類に入れたが、〈壁が破れる〉の許容度が低かったのは、壁にはある程度厚みがあり〈破れる〉という表現がふさわしいと思った人が少なかった為であろう。さらに、〈破れる〉は〈破る〉とは異なり、自然に一部に損傷が起きると考えられることが多い場合に用いられるが、〈壁〉の場合はそういうことがあまり考えられないから許容度が低かったのであろう。なお、〈塀が破れる〉に関しては、〈壁〉が主語にくる場合ほどではないが、やはり許容度は低かった。

c. 壁面中立変化

壁が光る (71)

d. 壁体表層(一)変化

壁がはがれる (90)

e. 壁体(一)変化

壁が崩れる, 壁がいたむ, 壁が落ちる (以上 100), 壁が変質する, 壁が傾く (以上 90), 壁がたおれる, 壁が朽ちる, (以上 76), 壁がわれる (38)

〈塀が崩れる〉, 〈塀が落ちる〉の場合は許容度がそれぞれ, 90% と 52% である。この事実は, 両動詞が立体的なものと関係して使われることが多いという点から, 壁の方が塀より厚いと一般には考えられているということを示している。なお, 〈壁が落ちる〉とか, 先の b で挙げた 〈壁がひびわれする〉は程度の差こそあれ部分的な損傷であるが, 一方 〈たおれる〉, 〈傾く〉は壁体全体の損傷である。

3.2.1.4 状態を表わすもの

壁がある(場所が国境/台所の場合 (90), 家/部屋の場合 (81), 町/庭の場合 (52)), 壁がそびえる (48)

ここには, 金田一 (1950: 316) で状態動詞に分類されている 〈ある〉と, 状態を帯びることを表すいわゆる第四種動詞を入れた。その他, 〈崩れている〉の様に 〈ーている〉を付ければ状態化する動詞が多いが, これらは省略した。〈塀がそびえる〉も同様だが, 〈壁がそびえる〉の許容度が低いのは金田一 (1950: 297 - 8) で述べられている様に, 普通この種の動詞には 〈ーている〉を付けないと文法的ではないということが原因しているといえよう。

3.2.1.5 機能を表わすもの

仕切り, 防御, 耐力等, 機能に関係した動詞は当然多い。

a. 仕切り

壁が部屋を仕切る (100), 厚い壁が国と国とを隔てる (95), 壁が部屋を囲む (90)

〈壁が部屋を囲む〉は上記の様な許容度であったが, 〈壁が庭／公園／工場／刑務所を囲む〉の場合は許容度は 40～60% と落ちる。ところが〈塀が庭／公園／工場／刑務所を囲む〉の場合は 90～100% の許容度になり, 〈塀が部屋を囲む〉は 38% の許容度しかなかった。これは, 部屋と壁との関係, 塀と庭, 公園, 工場, 刑務所との関係の深さを示している。

b. 防御

壁が風／寒さを防ぐ, 壁がプライバシーを守る, 壁が視線／音をさえぎる (以上ほぼ 100), 壁が地震／火事に耐える (90), 壁が建物をかくす (62)

〈塀が建物をかくす〉は 95% の許容度となったが, これは塀の機能が一つには家 (庭も含め) を囲むものであるからである。一方, 〈壁が建物をかくす〉の許容度が低いのは, 白壁があるにもかかわらず, 一般には壁が敷地を囲むものとは感じられていない為であろう。尚, 〈塀が音をさえぎる〉の許容度が 62% しかなかったのは, 〈塀〉は〈壁〉ほど音をさえぎる機能と関係していない為であろう。

c. 耐力

壁が屋根をささえる (81)

20% 近くの人が可としないのは, 日本に於いては, 屋根の重みをささえる耐力壁が少ない為であろう。

d. その他の機能

壁が部屋を温かくする (71), 壁が家と家とをつなぐ／壁が二つの塔をくっつける (43)

長屋など, 家と家とを仕切る戸境壁があるにもかかわらず, 〈壁が家と家とをつなぐ〉の許容度は低かった。

3.2.1.4 その他

一郎君, そんなことをすると壁が笑うよ (38), 次郎君, そんなことをすると壁が泣くよ (57)

一方, 〈一郎君, そんなことをすると塀が笑うよ〉, 〈次郎君, そんなことをすると塀が泣くよ〉はそれぞれ許容度が19%, 43%であった。〈壁〉の場合の方が許容度が高いということは, 知覚動詞の所でも述べたが, 壁の方が擬人化の対象となりやすいということであろう。また, ここに挙げた文以外の場合でも, 動詞が〈笑う〉の場合より〈泣く〉の方が許容度が高いのは, 日本人の悲しいものを好むという国民性からきているといえよう。

3.2.2 〈壁〉が目的語となる場合

様々な問題があるが, 格助詞〈を〉を伴うものを目的語と考える。なお, 自動詞〈こわれる〉と他動詞〈こわす〉の様に, 状況によっては, 別の視点で同じ内容の事柄を記述していると考えることができる場合もあるが, 森田 (1980: 207) 等に依れば, 他動詞の方が行為者の動作により視点が当てられていると考えることができ, 多少の相違点があると考えられるので, 対応する自動詞形がある場合も, ここでもう一度取り挙げることにする。

さて, 3.2.2.1 から挙げる 〈壁〉と共起しやすいと思われる動詞以外にも, 以下の点に興味が持てた。

〈壁を走る〉, 〈塀を走る〉は, いずれも容認可能性がきわめて低い。しかし 〈ねこが壁の上を走る〉とすると52%, さらに, 〈ねこが塀の上を走る〉の場合は, 86%の人が容認可能であるとしている。ところで, どうして〈壁〉と〈塀〉とではこの様に許容度が異なるのであろうか。一つの理由としては, 壁は最上部の水平面が, 一般に他のもの, 例えば, 屋根におおわれていて, 走る対象とはなりえないが, 〈塀〉は最上部がふさがれていないことが多い為であると考え得る。

3.2.2.1 設置・製作・修理

a. 設置・製作

壁を塗る (100), 壁を仕上げる, 壁を作る (以上 90), 壁を建てる, 壁をめぐらす, 壁を築く (以上約 75), 壁を積み上げる (52, 但し不可とした人のうち 1 / 3 は? であった。)

建築関係の文献には, よく例が見られるにもかかわらず〈壁を積み上げる〉の許容度が低いのは, 日本では, 壁を作る場合に, レンガ, 石などを積み上げることがあまりないからであろう。また, 〈塀を積み上げる〉は 38% とさらに許容度が低くなる。これは, 積み上げて作るブロック塀があるにもかかわらず, 木の塀などうすいものを連想した為であろう。

b. 修理

壁を塗り変える, 壁を直す, 壁を修理する (以上ほぼ 100), 壁を広げる (71), 壁を広くする (57), 壁を高くする (67), 国境の壁をさらに高くする (81)

〈高くする〉の場合, 〈国境の壁を〉とすると場所が明らかでない場合より許容度が高くなるのは, 実際はどうであれ, インフォーマントが国境の壁の存在を意識しているということを暗示している。〈国境の塀をさらに高くする〉の許容度はほぼ 70% であるから, 国境には塀よりも壁の存在が意識されているといえる。尚, 〈刑務所の壁をさらに高くする〉は許容度が 86% であったが, これは, 刑務所の外側の一般に塀と呼ばれるものを連想しているか, 牢獄の壁のことかは少々疑問だが, 刑務所には壁が存在するということをインフォーマントが感じている為であろう。一方, 〈刑務所の塀をさらに高くする〉は 100% の許容度であった。これは刑務所の外との仕切りとなるものは, 一般に塀と呼ばれている為であろう。

3.2.2.2 変化が関係してくるもの

a. 壁面 (+) 変化

壁をふく (86), 壁を洗う (81), 壁を広げる (71), 壁を広くする

(57)

〈壁をふく〉, 〈壁を洗う〉をここに分類するのは少々問題があるが, ふいたり, 洗ったりした結果, よごれやほこりが取れ壁面に良い結果をもたらすからここに入れた。

尚, 〈塀をふく〉の様に, 目的語が〈塀〉の場合には容認可能性が増すのは, 塀の方がふいたり洗ったりする対象となりやすいことを示している。さらに, 〈塀を広げる／広くする〉の容認可能性が90%であるのは, 塀の方が独立性が強く手を加えやすいことを示している。

b. 壁面(－)変化

壁をよごす(100)

c. 壁体表層(＋)変化

壁を上塗りする(95)

〈塀を上塗りする〉は86%の容認可能性であった。

d. 壁体(＋)変化

壁を換える(71)

〈塀を換える〉は100%可とされた。これは塀の方が取り換えが容易であることを反映している。尚, 3.2.2.1. bで挙げた文の動詞もこの部類に属すると考え得る。

f. 壁体(－)変化

壁を崩す, 壁をつき破る, 壁をこわす, 壁を取り払う(以上ほぼ100%)

〈町の壁を崩す〉, 〈公園の壁を崩す〉と設置場所を明らかにしたのに, 許容度が, それぞれ71%, 81%と減少したのは, 町や公園には, 普通, 壁があるとは考えられていない為であろう。

3.2.2.3 状態を表わすもの

〈壁をはがしてある〉の様に〈－てある〉形で, 今検討している動詞の多くが状態化するが, ここでは, その点は問題にしないことにする。

3.2.2.4 克服可能性

壁を乗り越える (86), 壁を飛び越える (81), 壁をよじ登る (76),
壁をまたぐ (19)

目的語を〈塀〉に置換えた場合、上記の文は〈塀をまたぐ〉を除いて、
ほぼ 100% 可とされた。〈塀をまたぐ〉の場合も 43% の人が可とした。

〈壁〉の場合と〈塀〉とで、この様な差異が生じたのは、すでに指摘した
様に、塀は最上面があいていて乗り越え可能であるが、壁の方は、構造物
の一部と考えられることが多い為、乗り越え不可能とインフォーマントが
判断したといえよう。例えば、〈台所の壁を乗り越える〉を半数以上の人
が完全に容認不可能であるとしたのは、明らかに内部の壁であり、何かに
よって普通ふさがれているからである。

なお、〈壁を乗り越える〉の容認可能性がかなり高いのは、〈壁〉が障害
となる物という様な比喩的な意味に解釈された場合がある為であろう。上
記の文を不可とした人の半数以上は完全に不可としたのではなく、ややお
かしいとしたのも、この点が影響していると考え得る。

3.2.2.5 装飾

壁を飾る (76)

現在では、絵、写真、ポスター、プロマイド等で壁を飾る人も多くいる
ので、案外許容度が大きかったのであろう。例えば、『モダンリビング、
No.47, 1987 年』の質問欄に「壁面を上手に飾りたいと思います。どうい
う点に注意をすれば良いですか?」という質問が取り上げられていること
からも、壁を飾るということが多くなってきていることがうかがい得る。
なお、この文を完全に不可とした人と、ややおかしいとした人の割合はほ
ぼ半々であった。

3.2.2.6 その他

壁を本箱でかくす (95), 壁を押す (86), 壁をおおう (76), 壁を囲
む (62), 壁をつるす (5)

〈壁を本箱でかくす〉という文が95%の許容度であったということは、本来物を置くべき所ではない壁がものを置くのに使われているということを表わしている。一般に部屋数が少なく狭い日本の住居にはこれは必要なことかもしれない。しかし、一方、壁が部屋の雰囲気をよくするのに不可欠であるという意識がとぼしいということを示しているともいえる。

3.2.3 場所・対象

〈壁〉は、格助詞〈に〉と文節を形成し、主に場所・対象を表わすが、ここでは、これらのものと動詞との共起関係を扱う。

3.2.3.1 接触・衝突

壁にさわる、壁にふれる、壁にぶつかる、壁にぶつける（以上100）

〈塀にさわる〉などの場合もすべて100%可とされた。但し、〈壁にぶつかる〉は〈研究が壁にぶつかる〉という様に比喩とも取れる。

その他、〈壁に耳をあてる〉もこの部類に属する。この表現は、日本の壁の薄さをうかがわせるといえる。

3.2.3.2 〈壁〉が支えとなる表現

壁にもたれる、壁に絵をかける、壁に地図／ポスターをはる、壁にピンでとめる（以上、ほぼ100）、壁につるす（90）、壁に傘を立てかける、壁に絵がある（81）

〈壁に絵がある〉も場所を部屋と考えれば、語用論的には、壁にかけてある、壁に立てかけてあると取れるからこの部類に入れた。

ところで、3.2.3.1－2は主に壁面が関係してくる。

なお、〈壁に絵をかける〉、〈壁にものをつるす〉は壁が収納性を持つことを示す表現である。一方、〈塀に絵をかける〉、〈塀に絵をつるす〉は、それぞれ、47%、76%の人が可としただけである。このことから〈壁〉の方が収納性があるといえる。

3.2.3.3 開口

壁に穴をあける（100）、壁に窓をつける（81）、壁に戸をつける（62）

〈塀に穴をあける〉、〈塀に戸をつける〉は上記の場合とほぼ同様の許容度であったが、〈塀に窓をつける〉は、ほぼ半数の人しか可としなかった。

3.2.3.4 表面／表層装飾

壁に絵をかく (90)、壁に彫刻をほどこす (76)

〈塀に絵をかく〉、〈塀に彫刻をほどこす〉の許容度は、いずれも 67% であった。これは、塀の面が装飾の対象とはあまり考えられていない為であろう。一方、壁画がある様に、壁は、ある程度、装飾の対象となり得る。

3.2.3.5 表面から深部へ

以下に挙げる文は、〈壁〉が主語、目的語になる場合には、表面 (+) 変化、表層 (-) 変化等として扱ってきたものが多いが、ここでは、表面、表層、深部のいずれが関係してくるかという点だけに目を向ける。

a. 表面あるいは表層

壁に影がうつる、壁に落書する、壁にペンキをふきかける、壁に傷をつける、壁にひびが入る、壁に亀裂が入る (以上 100)、壁にほこりがつく、壁に泥を塗る (以上 90)

b. 深部

壁に塗り込める (95)、壁にダイヤモンド／死体をかくす (81)、壁に人を封じ込む (57)

〈塀〉の場合は、〈塀に塗り込める〉が 57% であるのを除き、すべて許容度は 50% 以下になる。これは、一般に日本の壁は薄いといわれているが、塀よりは厚みがあると意識されている為であろう。

3.2.4 手段

〈A で B を〉というかたちで、A に〈壁〉を入れた場合、壁が手段となり動詞には何らかの機能を表すものが多い。従って 3.2.1.4 で挙げた機能を表わす文と重複するが多い。

a. 仕切り

壁で部屋を仕切る (100), 壁で二つの部屋をへだてる (95)

b. 防御

壁で視界をさえぎる (95), 壁でプライバシーを守る (90), 壁で視線をさえぎる (81), 壁でできない部分をかくす (73)

〈塀〉の場合, 〈塀でできない部分をかくす〉は90%の許容度であったが, その他は〈壁〉の場合とほぼ同じであった。

c. その他

〈壁で柱を包み込む〉は建築関係の文献では大壁の説明としてよく出てくるが, この表現を可とした人は50%以下であった。これは多くの人が壁に関する細かい点まで目を向けていないということを示しているといえよう。

3.3 本セクションの要約

本セクションでは以下の点が明らかになった。

第一に, 〈壁〉は物理的に存在する壁のみならず, 主観的に障害となるものをさして使えるといえる。3.2.2.4の克服可能性の所で挙げたもののみならず〈壁にはばまれる〉, 〈言葉の壁〉, 〈文化の壁〉⁽⁶¹⁾ という様な克服の難かしさをうかがわせる表現がかなりある。

第二に, 触覚・情感に関する修飾語句, 並びに, 知覚動詞の箇所ですべた様に, 〈壁〉は擬人化, あるいは, 感情移入の対象となりやすいといえる。これは, 〈壁〉が障害であると感じられることがあるにもかかわらず, 我々を守るのみならず, 日常, 見たり, 触れたりすることができる身近な対象である為にそれだけ我々には存在感があると感じられる為であろう。この点, 塀とは大きな差異があるといえよう。

第三に, 壁の方がすべての面で多様性を持っているということが出来る。連体修飾語句との関係からは形, 色彩, 素材に於いて多様性があることが明らかになったし, 動詞との関係では機能に於いて多様性があること

がわかった。建物は、元来、多様性を持っているし、近年増々多様化しているの、建物の一部を構成する壁が多様性を持つのは当然である。

第四に、壁は建物の一部であると考えられることが多い為、塀に較べて独立性が少ないということがわかった。独自に位置を示す修飾語との共起に異和感を持たれた場合があるのみならず、〈壁が建つ〉が〈塀が建つ〉より許容度が低かったのはこの点を反映している。

第五に、我々は壁の壁面のみに視点を当てる場合が多いということがわかった。壁は実際は立体的なものであるが、我々の視覚に入るのは普通は面であるから壁面のみが関係してくることが多いといえる。このことは、例えば、〈四角い〉、〈長方形の〉という様な二次元的な形を表す修飾語との共起関係からも明らかである。さらに、壁面の中でも、家の内側のものに我々はより注目するということがわかった。〈内側の〉、〈内の〉という様な修飾語と〈壁〉との共起関係の許容度が〈塀〉の場合より高いことからこのことがいえる。これは我々がより家の中の壁と接することが多い為であろう。

第六に、立体的に壁を見た場合、〈中空の壁〉、〈壁が崩れる〉の方が〈中空の塀〉、〈塀が崩れる〉より許容度が高かったのは、壁にはある程度厚みがあると感じられていることを示している。さらに〈壁に死体をかくす〉という様な、日本の家屋には、あり得ない様な事柄を表す文の許容度がかなり高かったのは、西欧文明の流入で、日本人には壁に対して厚いものであるという固定観念ができていたということを示している。その他、日本ではあまり大切にされていないと一般にいわれている〈プライバシー〉という表現を含む〈壁がプライバシーを守る〉の許容度が高かったのも西欧思想の影響から来ていると思われる。日本家屋には壁がない、と少ないという建築家の記述を良く見るにもかかわらず、第一点で述べた〈壁〉が障害になるものを表す比喩的表現として使われるのも、実際の壁の形状からくというよりは、何らかの理由によって形成された固定観念

と関係しているといえる。

その他、〈塀〉より〈壁〉の方が〈かたい〉、〈柔らかい〉との共起関係に於いて許容度が高かったことから壁の方が弾力性があると感じられていることもわかる。

なお、家以外の壁にも範囲を広げると、部屋、家、刑務所、国境には、明らかに壁の存在が感じられているが、庭、刑務所の中と外を仕切るものは塀であると感じられていることが明らかになった。

以上の様に見てくると、日本人は壁は厚い、とか障害物である、一方塀はうすいという固定観念を持っているにもかかわらず、壁は近代化の影響の為機能、形状に多様性があるから、また塀はだんだん忘れられていくものであるから、両者に対するイメージの乱れがあるといえる。ある程度厚みがなければ塀の上を動物は走れないはずであるが、〈ねこが塀の上を走る〉の許容度が高いのも〈塀〉は薄いものであるという固定観念とは相容れないものである。また壁が我々を守るものであったり、感情移入の対象になり易いの、一方では障害であると感じられているのも、矛盾する点である。

4. 慣用表現

4.1 成句

辞書、辞典類にあげられているものは次のとおりである。

壁越し推量（外部よりおぼろげに推量すること）

壁下地をかく（下準備をする、下工作をする）

壁訴訟（訴える相手がなく、ひとり壁に向かってぶつぶついうこと、陰で苦情をいうこと）

壁見参（同上）

壁立つ極^{きわみ}（空のはて、視界の限り）

壁と見る（野暮と見なす、人をバカにする）

壁にする（同上、〈人を壁にする〉も同じ）

壁に突き当たる（困難なことに直面する、仕事などが行きづまる）

壁にぶつかる（同上）

壁に^{つた}鳶（退き心、逃げようとする気持ち、手を切ろうとすること）

壁の大工（壁を塗る職人、左官、泥工、〈壁塗〉も同じ）

壁の中の書（^{ふみ}奏の始皇帝の「蔵書の禁」で孔子の家の壁の中に隠されていたものが漢代に発見されたことから、「古文尚書」、「古文孝経」などをいう→中国故事）

壁の^{から}殻（豆腐のかす、おから）

壁一重（極めて近接していること）

壁を^{うが}穿つ（貧しいので、壁に穴をあけて隣のあかりのもれるので本を読む、〈壁を穿って光を引く〉、〈壁を穿ちて書を読む〉も同じ→中国故事）

壁を^{しよ}背負う（壁を背にしてすわる）

壁を塗る（厚化粧をする）

壁を破る（困難を克服する、障害を押しのかけて新しい段階に突き進む）

乗り掛けた壁（どうしても突き抜けねばならぬ難関）

夢にも壁にも（すこしも、夢いささかも）

以上 20 例の中で、現在使用されるものは半数以下である。次に 〈壁〉の音読み「ヘキ」の成句を 6 例あげる。

金城鉄壁（簡単には攻め落とせない城、きわめて堅固な物事のたとえ）

鉄壁の陣（非常に堅固な陣営）

壁立（壁のように突っ立つ、貧乏して家具等のない形容）

壁光（〈壁を穿つ〉と同じ）

壁経（〈壁の中の書〉と同じ）

防壁（敵の侵入を防ぐ砦，防御となるもの）

4.2 諺

壁に馬を乗り掛ける（①だしぬけに行動を起こして，無理押しをすること ②突然困難にぶつかり，当惑すること ③事が急迫しているのに，おくればせに着手すること）

壁に茶壺（妊娠した女の腹のたとえ）

壁に塗られた田螺（^{たにし}身動きがとれないことのたとえ，一生世に出ることができず栄えることのないさま）

壁に耳（密談などのもれやすいたとえ→西欧語にも同様な表現がみられる。〈壁に耳あり，障子に目あり〉を始め，〈後ろの目，壁に耳〉，〈風の物言い，壁に耳〉，〈壁に耳，石に口〉，〈壁に耳，垣に目〉など上下に対になる表現を付したものの多数あり。〈壁の物言う世〉，〈^{まかぎ}籬に耳，壁の話する世の中〉，〈耳は壁を伝う〉も同じ）

壁の穴は壁で塞げ（性質の違うもので補足すると調和しないというたとえ）

壁の繕いは土でなければできぬ（同上）

浮世の苦楽は壁一重（この世の苦楽は隣り合っており，変転してきわまるところがないの意）

近隣は壁を隔つるに如かず，壁を隔つるは門を対するに如かず（親密な間柄でもそれ相当の隔たりを置いて交際せよの意〈親しき仲に垣をせよ〉と同じ）

地獄は壁一重（わずかな欲望，油断，失敗などから人がたやすく罪を犯すこと）

食前の茶は壁下地洗うが如し（むだなことのたとえ）

銭有り千里も通ず，銭無し壁を隔てて^{つんぼ}聳す（世の中は金があれば何でもできるが，無ければ簡単なこともできないの意）

銭財壁を過ぎて^{うずたか}堆きも，行くに臨んで^お帯ぶることを得ず（暴利や^{りん}吝

蓄^{しよく}を戒めて、財産がどれほど多くても、人間一人で扱える額には限りがあること)

黙り虫壁を通す (①黙々と努力する者は、人の気づかぬうちに大事業を成し遂げるものだというたとえ ②ふだんおとなしそうにしている者にかぎって、こちらが油断している間にとんでもないことをしでかすものだというたとえ)

鼠壁を忘る、壁鼠を忘れず (害を加えたほうはそのことを忘れているが、加えられたほうはいつまでも忘れないことのたとえ)

人の苦楽は壁一重 (他人の苦楽はそれがどんなに切実であっても他人事としか感じられないの意)

人の耳は壁に付き眼は天をかける (陰で言っていることや隠していることはすぐに世間に知れわたるもののだの意)

缶^{ほとぎ}をかむって壁に向かうが如し (前途が全くわからぬこと、危険に気づかずそれに近づくこと)

盲の壁覗き (①何んの役にも立たぬこと、やってもむだなことのたとえ ②むだであるが、やってみれば気がすむこと)

以上 18 例中〈壁に耳〉を除くと、ほとんど現在使用されない。〈塙〉についての諺は見当らない。一般庶民の住居では塙をもたぬものが多く、馴染みがうすいため、ことばに反映されなかったと考えることができよう。

5. 象徴

日本語の〈壁〉はあまり良いことに譬えられないようである。

- a. 通交を遮断する機能から、わけへだて、障害物の象徴として、しばしば用いられる。例えば、1987 年 3 月 24 日の朝日新聞の読書欄で夫・藤堂明保追悼のため『花落ちていまだ掃かず』を出版した藤堂里子は、夫は戦争体験については語らず、「壁をつくり、私を立ち入らせたくないようでした。」(らいたあ登場)と語っている。問題の解決が見当たら

ず、行き詰まったとき「壁に突き当たった」という表現も日常よく用いられる。

他人とのあいだに壁を造る。

壁に突き当たる。

- b. しかし、〈壁〉が象徴する障害は絶対的ではない。

壁越推量

壁一重

などでは、むしろ障害がこえやすいことを暗示している。壁一重の隣は近いのである。ついでに、柳田国男の『妖怪名彙』や水木しげるの漫画に登場する妖怪ヌリカベは、棒をもって上ではなく、下を払うとすぐに消えることになっている。

- c. 音を遮るところから、答えのないこと、無言の、反応の無い相手にむかって働きかける無駄を言う。「日がな一日壁とにらめっこ」とは、無為の状態である。

壁訴訟、壁見参、壁言

- d. 日本建築では壁は原則として建物の妻側にある。また西欧では部屋の壁際に坐る傾向があるのにたいし、日本建築では中央に坐る傾向があるところから末席にたとえる。例えば、

壁女郎

「塗りたって妾は奥を壁とする」という川柳の場合、「壁とする」とは、見下すの意味である。

- e. 日本壁の左官工事においては塗るという作業が重要であるため、白粉塗りを重ねる厚化粧を〈壁塗り〉とたとえる。また、壁を塗ると寝るを掛け言葉にして〈壁〉を夢のたとえとする特殊な例もある。和歌に用いる。

「まどろまぬ壁にと人を見つるかな、まさしからなむ春の夜の夢」
(後選和歌集)

f. 戦前までは漆喰壁、白壁造りは大きな商家などの一種のステータス・シンボルであった。その他に、特に前近代の身分社会では、身分に応じた塀の造りが定められていた。

なお日本語の〈壁〉は、保護してくれるものの象徴としてはあまり用いられていない。城の壁は防御的ではあるが、庶民にとってはむしろ威圧的な権威の象徴であろう。

おわりに

日本の伝統家屋について、建築家ブルーノ・タウトは第一印象を「大きい方の部屋は直角に接している二方が外に向かってすっかり開け放たれている。しかしこれが『室』と言えるだろうか、有体には言えば、——地上にやや高く架構された開け放しの堂でしかない」（篠田英雄訳『日本の家屋と生活』岩波書店、1981年、p. 7）と述べている。また、「いずれにせよ日本人は、『わが家は即ち我が城郭』というイギリスの諺を主張するわけにいかない。私は今日、自動車でここへ来る道すがら、商店は別として一般の住宅には、たいてい家の前に高い塀（概ね板塀であった）があって、街路から遮られているのを見た。しかし住宅そのものは、たとえ屋根がありまた建築も非常に洗練されているにせよ、いわば天幕にすぎない」（同上、p. 22）と見なした。タウトが日本を訪れた1935年当時の日本の民家には、西欧建築に見られるような厚く頑丈な壁は少なかったからである。土蔵の壁だけは例外であって、タウトはこれに注目している。

また、最近いくつかの日本文化論を書いているオーギュスタン・ベルクは「私としては、家屋空間が日本ではヨーロッパにおけるほど物理的に保護されていないという考えにくみしたくない。ただヨーロッパと違うのは、日本の場合、閉鎖が、庭園に対する家屋（わずかな閉鎖）、近隣に対する庭園（中位もしくは強度の閉鎖）という二段階にわたっているということなのだ」（宮原信訳『空間の日本文化』築摩書房、1985年、p. 156）

とする。つまり伝統的な日本の居住空間では壁よりも塀が強固であるという印象を抱いているのである。

たしかに日本の伝統的な建築には、壁が少なかったという事実は、ことばの上にもその影響を残している。われわれの行った調査によっても、日本語の〈壁〉には関連語彙や成句が多くないし、〈壁〉はあまり良い象徴的意味を持たない。

他方、現代の日本語の〈壁〉には、たしかな変化もみられるのである。アンケート調査によって探った結果、〈壁〉と連体修飾語句や動詞との共起関係の許容度はわれわれが予想した以上に高まっていることがわかった。〈土の壁〉以外に〈石の壁〉、〈レンガの壁〉、〈コンクリートの壁〉に異和感は無く、〈ガラスの壁〉も可能になりつつある。素材の点だけでなく、壁にたいして触覚や視覚に関する形容詞を付することも多くなっている。壁がわれわれの生活の中で次第に身近かな存在になりつつあることがうかがわれる。

アンケート調査からは、〈壁〉と較べると〈塀〉の共起関係の許容度は限られているという結果も出た。〈壁〉と〈塀〉のあいだには区別の混乱も生じている。物としての塀が現代の都市生活の中から消える傾向が、ことばの上に反映しているのだとおもわれる。核家族化現象も関係しているのであろう。〈塀〉が〈壁〉に吸収されつつあるということもできよう。

〈壁〉の意味範囲は拡がり、〈壁が部屋を囲む〉、〈家を囲む〉、〈町を囲む〉、比喩的には〈国を囲む〉も可能になっている。日本にも例えば都としての京都を囲む〈お土居〉など、都市を囲む壁とそれを指す語があるにはあった。しかし、アンケート回答者に詳しく質問すると、回答者はむしろ西欧的な都市の壁、あるいはベルリンの壁などを思い浮かべながら答えている。物としての壁が実際に変化し、種類や数も多くなるに従って、ことばと概念が変わるだけでなく、絵画、写真、テレビなどによるイメージが事実に行先して、ことばに変化をもたらしているのも興味深い。

注

- (1) 〈かべしろ〉、布帛（とばり）等、壁の代りの間仕切り。
- (2) 町、城等、広範囲な外部壁。
- (3) 〈かべがき〉、壁と垣。
- (4) 〈しょうへき〉、壁と垣。
- (5) 土を基本にした伝統的な日本の壁。
- (6) 胸までの高さの壁で、弓矢などの防御用。
- (7) 櫓等、開口部の上部の壁。
- (8) 柱を表わさない二重壁。
- (9) 心が土でその両面を仕上げて用いる中間に空間のない壁。
- (10) 連続した家屋の境をなす壁。
- (11) 〈ささらこべい〉 端重にした横板を押縁でおさえ、間柱の間にはめこんだもの。
- (12) 柱の根もとを土にうずめる工作上からの名称。
- (13) 木骨土造の塀で、昔は公卿衆だけが許された。
- (14) 練土を積み上げた素朴な塀の上方方言。
- (15) 腰長押の上部を連子などで透かしたもの。
- (16) 土塀でその断面が太鼓型のもの。
- (17) 上部に火灯窓のついたもの。
- (18) 下は板ばり、上は塗壁とした高級なもの。
- (19) 鉄筋コンクリート塀のこと。
- (20) ^{とおしへい}透塀で、伊勢内、外宮の鳥居正面に設けられた目かくし塀。
- (21) 下手な大工のこと（岐阜、滋賀方言）（古語）。
- (22) 壁の中を貫き、その支えにしている横木。
- (23) 両側を壁にした渡り廊下。
- (24) 壁を塗る時、下張に用いる粗製の綿布。
- (25) 壁を作るのに用いる草（古語）。

- (26) 篠竹などを縦横に縄でからげた伝統的な壁下地。
- (27) 〈かべすさ〉 ひびわれを防ぐ為に、壁土にまぜるわら床、和紙などの細片。
- (28) 豆腐のこと。
- (29) 豆腐のかす。
- (30) 鉾石の焙焼炉の一種。
- (31) 壁に書くこと、また、その文字。昔、法令などを壁にはりつけた掲示（古語）。
- (32) 近隣のこと。
- (33) 相手となるものがないのに、あたかもいるかの様に振舞うこと（古語）。
- (34) 壁をへだてて話をするその言葉（古語）。
- (35) 訴える相手がなく、一人でぶつぶつと苦情をいうこと（古語）。
- (36) 将棋で、自分の陣の銀将が自軍の王将の逃げ道をふさぐ形、 マイナスの防御。
- (37) 登山用具の一種。
- (38) 〈かべじし〉 かもしか（岐阜、石川方言）。
- (39) 壁を通して室内に入ってくる湿り気。
- (40) やもりの異名。
- (41) 手を壁に当てて身をもたせかけておき、その手で壁を突いた拍子に身を離して直立するという遊びの名。
- (42) 下等な遊女（江戸時代の尾張方言）（古語）。
- (43) 塀のこと（熊本、千葉、秋田、青森方言）。
- (44) 〈部切（へきり）〉と同じ、仕切ること。
- (45) 空間を区切ったり、目かくしにしたりする屏風、衝立の類。
- (46) 岸と浅い潟と隔てて平行に発達する珊瑚礁。
- (47) 幕、屏風など屏の代用としたもの（古語）。
- (48) 〈へいふう〉、〈びょうぶ〉のこと。
- (49) 日おおいのない幕、幔幕。

- (50) 取り去って与えないこと。
- (51) 世を退いてこもっていること。
- (52) 人を退けてひそかに語ること（古語）。
- (53) しりぞけて行わないこと。
- (54) 息をこらしてじっと静かにすること。
- (55) 顔をおおう道具（古語）。
- (56) 監獄法による懲罰の一種。
- (57) 心が落ち着かないこと。
- (58) 寝殿造中門の簡略化されたもの（古語）。
- (59) 〈屏中門〉のこと。
- (60) 塀や壁を塗るのは十月が良いと言うこと（古語）。
- (61) 昭和 62 年 3 月 11 日の NHK ニュースセンター 9 時に於いてこの表現が用いられた。中国残留孤児の日本定住の難かしさの一要因として、日中の文化的差異があるということを意味していた。

参考文献

- (1) Berque, Augustin; *Vivre L'espace au Japon*, Paris, P. U. F., 1982.
- (2) 相田武文『建築形態論』明現社, 1977 年。
- (3) 芦原義信『外部空間の設計』彰国社, 1975 年。
- (4) ベルク・オーギュスタン『空間の日本文化』宮原信訳, 筑摩書房, 1985 年。
- (5) 藤井乙男編『諺語大辞典』有朋堂, 1925 年。
- (6) 五光照雄『言葉からみた日本人, 間の感覚と内外の視点』自由現代社, 1979 年。
- (7) 長谷川堯『建築有情』中央公論社, 1977 年。
- (8) 橋場信雄『建築用語図解事典』理工学社, 1970 年。
- (9) 保坂陽一郎『空間の演出, 窓』彰国社, 1984 年。

- (10) 保坂陽一郎『境界のかたち』講談社サイエンティフィック, 1984年。
- (11) 稲葉和也他『絵本, 日本人のすまい』彰国社, 1983年。
- (12) 石上文正『空間と身体, 考現人間学的アプローチ』PMC 出版, 1985年。
- (13) 加藤涉他『建築的空間』彰国社, 1976年。
- (14) 川本茂雄他編『日本の言語学』大修館書店, 1979年。
- (15) 建築用語辞典編集委員会『建築用語辞典』技報社, 1965年。
- (16) 剣持武彦他『日本人と「間」』講談社, 1981年。
- (17) 国廣哲弥『意味の諸相』三省堂, 1970年。
- (18) 国廣哲弥編『日英語比較講座』大修館書店, 1981年。
- (19) 黒川紀章『建築論, 日本の空間へ』鹿島出版会, 1982年。
- (20) 増田正『壁・窓・格子』グラフィック社, 1978年。
- (21) 森田良行『基礎日本語』角川書店, 1976年。
- (22) 諸橋轍次『大漢和辞典』大修館書店, 1960年。
- (23) 向井正也『日本建築・風景論』相模書房, 1980年。
- (24) 日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』小学館, 1972年。
- (25) 落合直文『日本大辞典, 言泉』大倉書店, 1931年。
- (26) 大河直射『住まいの人類学』平凡社, 1986年。
- (27) 奥野健男『間の構造』集英社, 1983年。
- (28) 大野晋『岩波古語辞典』岩波書店, 1975年。
- (29) 大野晋他編『角川類語新辞典』角川書店, 1983年。
- (30) 新村出編『広辞典 (第三版)』岩波書店, 1983年。
- (31) 尚学図書編『故事・俗信, ことわざ大辞典』小学館, 1982年。
- (32) 鈴木博之『世界建築辞典』鹿島出版会, 1984年。
- (33) 鈴木棠三他編『故事ことわざ辞典』東京堂, 1970年。
- (34) タウト・ブルーノ『日本の家屋と生活』篠田英雄訳, 岩波書店, 1981年。
- (35) 高橋康夫『建具のはなし』鹿島出版会, 1986年。
- (36) 外山知徳『住まいの家族学』丸善, 1985年。

- (37) 上田篤『日本人とすまい』岩波書店, 1974 年。
- (38) 上田篤他『空間の原型』筑摩書房, 1983 年。
- (39) 山田幸一『壁』法政大学出版局, 1981 年。
- (40) 山田幸一『日本壁のはなし』鹿島出版会, 1985 年。
- (41) 柳田国男『明治大正史世相編』柳田国男集第 24 卷, 筑摩書房, 1970 年。
- (42) 吉田桂二『住の神話』鳳山社, 1985 年。
- (43) 吉田徳治『門と堀』保育社, 1979 年。
- (44) 『平凡社大百科辞典』平凡社, 1985 年。
- (45) 『建築大辞典』彰国社, 1974 年。
- (46) 『人生読本, 住まい』河出書房新社, 1980 年。